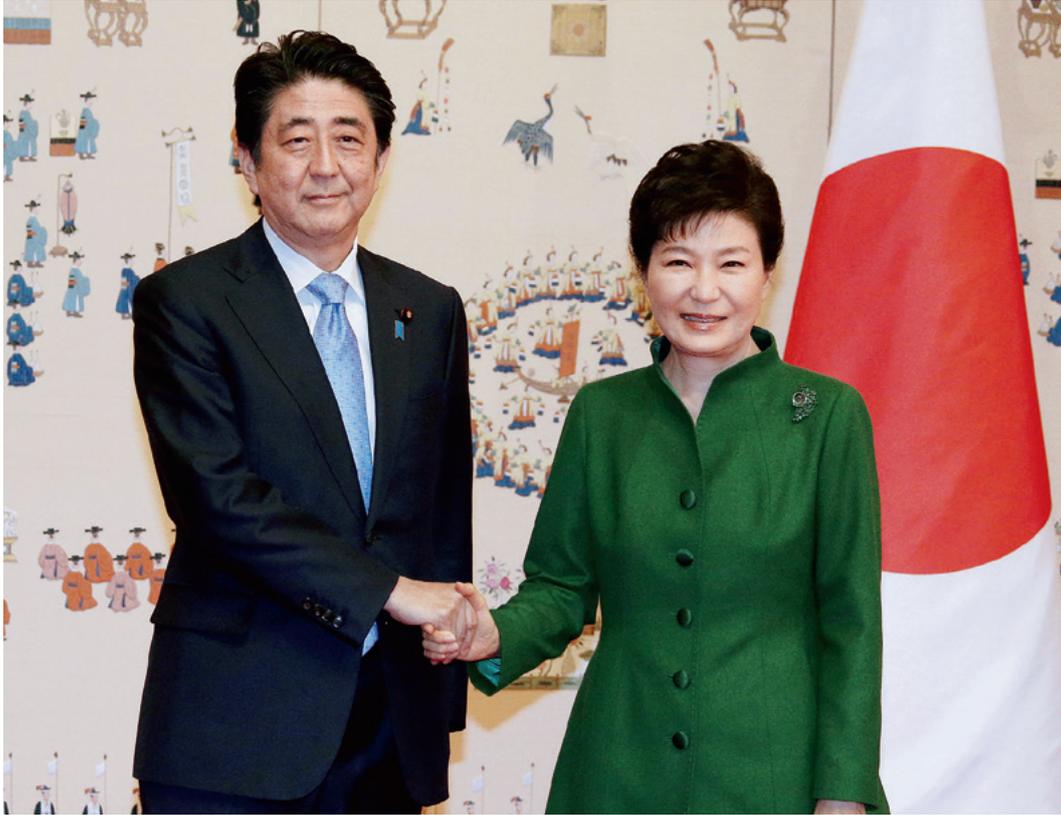


日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <http://www.jnpc.or.jp/>



初の安倍・朴会談

日韓首脳会談が3年半ぶりに行われた。会談前に握手する韓国の朴槿恵大統領(右)と安倍晋三首相
=11月2日、ソウルの青瓦台で

撮影：中村 光一(読売新聞社写真部)

今年も「プロが選ぶベスト・プロ」推薦を
クラブ賞、特別賞の応募始まる

2016年度の日本記者クラブ賞と同特別賞の選考プロセスが始まった。両賞の候補推薦を募集する案内を今月、プレスの基本会員と個人会員全員に送る。また、昨年につき、新聞協会あるいは民放連に加盟しているがクラブには加わっていない社にも特別賞の候補推薦を呼びかける。

来年1月末に推薦応募を締め切り、推薦委員会と選考委員会の2段階で審査。4月の理事会で受賞者が決まり、贈賞式は5月に行う日程だ。

クラブ賞の受賞者は「クラブの会員、または法人会員に属する個人」であり、一方、特別賞は「原則として会員または法人会員に属するもの以外」を対象とする。14年度は特別賞の応募が少ないこともあり、受賞者が出なかった。理事会は昨年、特別賞の推薦を幅広く呼びかけるため内規を改定した。15年度は7件の推薦が集まった。

クラブ賞と特別賞はともに、クラブが毎年、最高のジャーナリストを顕彰する。プロが選ぶベスト・プロだ。今年も多くの推薦をお願いしたい。

(中井良則)
*21ページに応募要項など

今月のことば

「韓国では反日の本は売れない。何を言うかといえば、村上春樹のもの」

朴正鎮・津田塾大准教授(10・22)

9ページ

「難民問題を契機に、メルケル独首相は、EUの基盤が倫理観にあることを気づかせた」

ローバック・駐日スウェーデン大使(10・21)

11ページ

クラブゲスト
 研究会「大丈夫か、マイナンバー」3
 甘利明・経済財政・再生担当相／ジョー
 ンズ・ラグビー日本代表チームHC 4
 小栗康平・映画監督／海外日系人の戦
 後／柴田優呼・ニュージーランド・オタ
 ゴ大助教授 5
 トルコ人ジャーナリストを囲む会／
 神宮外苑と国立競技場を未来へ手
 わたす会／カラツオリス・駐日ギリシ
 ャ大使 6
 竹花豊・全国万引犯罪防止機構理事長／
 オランダの労働市場改革に学ぶ／ジ
 ャヌージ・米マンスフィールド財団理事長 7
 岡慎一・第29回日本エイズ学会学術集会・
 総会会長／シルバ・元ブラジル環境相／
 奥野長衛・JA全中会長 8
 朴正鎮・津田塾大准教授／山口那津男・
 公明党代表／シンガー・ユニセフシリア事
 務所代表、ブランド・同本部事務局次長 9
 プーア＝ブキッキオ・子どもの売買、
 児童売春、児童ポルノに関する特別報告者
 ／野口健・登山家／志位和夫・日本共
 産党委員長 10
 セルダハイ・駐日ハンガリー大使／ロ
 ーバック・駐日スウェーデン大使 11
 私と小栗監督の「泥の河」 11
 西島雄造

記者ゼミ 次世代ジャーナリズム
 の現場編 12
 藤村厚夫・スマートニュース社執行役員
 ／橋元良明・東大大学院情報学環教授

ワーキングプレス
 TPP大筋合意 13
 日本経済新聞社 太田泰彦
 日本人同時受賞 科学部の10月 14
 読売新聞社 増満浩志
 大村智さんノーベル賞受賞 山梨発 15
 山梨日日新聞社 前島文彦

書いた話書かなかった話 16・17
 コンファームはトップの口から
 高島益郎外務次官の思い出
 井芹浩文

被災地通信 岩手県気仙仙地域 18
 食卓に戻るその日まで
 地元酒蔵 帰郷への思い
 岩手日報社 小田野純一

リレーエッセー 19
 最後の琉球政府主席・屋良朝苗さん
 時事通信社 軽部謙介

マイBOOKマイPR 20

新規入会 引き続き拡充 法人会員、賛助会員の入会金不要

理事会

10月26日開催された理事会は、最近の会員の入退会状況について協議し、理事会として会員拡充に今後も取り組むことを申し合わせた。あわせて、法人会員と賛助会員の入会金をいただかない特例措置を2016年度も続けることを決めた。

日本記者クラブは1969年、全国の報道機関が集まり設立された。それ以来、新聞、放送、通信の報道機関が法人会員として、クラブを支援してきた。法人会員社は意思決定機関である社員総会と理事会を構成し、各委員会も法人会員社の記者らを中心となり、クラブの日常活動を担う。法人、個人、賛助の3種類の

会員から受け取る会費はクラブ年間収入の83%を占めるが、法人会員は会費の6割強、収入全体で見ると半分以下を負担している。

このように、財政と運営の要となる法人会員社は1990年代には150社を超えたが、21世紀になって減り続けた。とりわけ2008年度から12年度の5年間で県域テレビ局を中心に23社も退会が相次ぎ、13年には126社にまで落ち込んだ。こうした事態に危機感を持った理事会は13年10月、財政立て直し策を検討し、理事会として会員増加を働きかける方針を決めた。入会金不要の特例措置もこの時、申し合わせた。

各理事の働きかけもあり、この2年間で法人会員の新規入会は11社を数え、2社の退会があったものの135社に回復した。一方、法人賛助会員も2年間で8社が退会したが、8社が入会したため、65社を維持している。伊藤芳明理事長はこうした状況を踏まえ「理事会として引き続き入会促進に取り組みたい」と呼びかけた。

**上期のプレス会見106回
 ニュース発信続く**

同日の理事会では15年度上期の事業報告と中間決算が報告された。また、マイナンバー制度にあわせ、法律で各事業体に制定が求められる特定個人情報報の「取扱基本方針」と「取扱規程」なども決定した。

プレス会見は「戦後70年 語る・問う」シリーズや、安保法制、安倍

首相談話、沖縄、東京五輪などニュースに連動したテーマを中心にゲストを招いた。マイナンバー、TPP、ドイツの戦後和解といった研究会も関心を集めた。村山談話と河野談話の当事者である村山富市元首相と河野洋平元官房長官の対談（6月9日）に323人が出席するなど、出席者が200人を超えた会見は5回。新聞、放送で詳しく報道された会見も多く、ニュース発信の場としてのクラブの役割を果たした。上期のプレス会見の回数は前年度に匹敵する106回だった。

上期の収支をもとに作った15年度末の決算見直しによると、収入は予算にやや届かないものの、支出は全般的に抑制に努めているため予算を下回り、正味財産は増加しそうだ。

取材団 岡山県と中国へ

10月28、29日の2日間、里山・里海をテーマに取材団が岡山県を訪れた。OB会員も含め、6社14人が参加した。山陽新聞の協力を得た。

11月8日から1週間の日程で初の中国取材団を派遣した。13社18人が申し込んだ。

2つの取材団の詳細は12月号で。
 (専務理事 中井良則)

研究会「大丈夫か、マイナンバー」



おかむら ひろみち
岡村 久道

弁護士

10・20(火)同研究会④/司会：
橋場義之特別企画委員/出席：
62人



みやした ひろし
宮下 紘

中央大学准教授

10・13(火)同研究会③/司会：
竹田忠委員/出席：57人/動画



そのだ まり
其田 真理

特定個人情報保護
委員会事務局長

10・9(金)同研究会②/司会：
竹田忠委員/出席：46人/動画



むかい はるき
向井 治紀

内閣官房社会保障
改革担当室審議官

10・2(金)同研究会①/司
会：竹田忠委員/出席：70人

便乗商法にも警鐘

其田氏

さらにマイナンバーの理解を難しくしているのは、企業が番号を扱うルールが、取得・利用そして廃棄に至るまで、法律やガイドラインで事細かに規定され、罰則まであること。法律の順守に目を光らせる**其田氏**は、マイナンバー保護の重要性を指摘した上で、便乗商法にも警鐘を鳴らした。これは特に中小企業などに対して、一部の業者が、高額なソフトや設備を買わせているもので、

制度の半分はIT政策

向井氏

国民全員に、一生変わらない12桁の番号をつけるマイナンバー制度。法律施行をはさんで2度目の集中勉強会が開かれた。依然として国民の理解が進んでいないのはなぜなのか？そして、後半の2回は、番号問題に隠れてあまり議論されることのない、個人情報保護法の特別法というマイナンバー法の正体に迫る議論が交わされた。

民主党政権下で制度の検討が始まって以来、現場を指揮するミスターマイナンバー・**向井氏**は、高齢化で膨らみ続ける社会保障を賄うためには、所得や資産に比例して、より多くを負担してもらう仕組みが必要であり、そのためには番号によるそうした情報の把握や連携が重要で、マイナンバーは、日本の将来のためには不可欠な制度と指摘。しかし、効率や利便性を高めるために、制度の半分はIT政策でできていて、この部分が分からないと混乱してしまうと話し、周知活動の難しさについて述べた。

プライバシーの復権を

宮下氏

国が求めているのは、そういう特別な対応ではない。「大事なものは鍵のかかる所にしまってください」というようなシンプルなものだとして理解を求めた。

一方、番号をめぐる本場の課題は、単に個人情報を保護すればいい、ということではない。番号による個人情報の連携に、そもそもどういう問題があるのか？そこはどういう注意が必要なのか、そしてどういう歯止めを考えておく必要があるのか？そうした本質的な議論がなされていないことこそが問題だと指摘するのが**宮下氏**。ビッグデータで個人情報の利活用に焦点があたる中、マイナンバー導入をきっかけに、プライバシーの意味を再確認し、そして復権させることが重要だと主張した。

最後にメディアに関する問題を指摘したのが**岡村氏**。個人情報保護法の特別法であるマイナンバー法の最大の課題は、マスメディアの適用除外条項が事実上欠如していることだと説明。たとえば調査報道でマイナンバーを裏付け資料として使うことが違法とされかねない。それなのにメディア自身が、このことを十分に分析、自覚できていないのではないかと強調。いまだに個人情報保護法が、取材を拒否する口実に使われている実態なども踏まえた上で、メディア自身がこの問題に関心を持つべきではと指摘した。

報道の自由からの視点を

岡村氏

企画委員 NHK解説委員 竹田 忠

あまり
甘利

あまり
明

経済財政・再生担当相

10・20(火)記者会見/司会・軽部謙介委員/出席：102人/動画

日米など12カ国による環太平洋経済連携協定(TPP)が大筋合意に達してから2週間余り。閣僚会合での立役者の1人として、「アジア太平洋地域の繁栄を約束する枠組み」と成果を大いに語った。



TPP によって 各国が関税を撤廃する品目の比率を示す「関税撤廃率」をみると、日本は95%

だ。この評価も立場で大きく異なる。日本がこれまで結んだ経済連携協定(EPA)の関税撤廃率を大きく上回る。牛肉・豚肉など重要5項目も一部は関税削減に応じるため、「聖域を守っていない」との批判が出さうだ。その一方で、日本以外の11カ国の関税撤廃率は全て99~100%なので、自由貿易重視の立場からは「日

垣間見えた

ルールメーカーとしての自負

本は低すぎ」との不満がある。甘利氏は関税をできるだけ撤廃する「高い野心」と「重要品目をしっかりと守る」という2つの要求を前に「どこで接点を持つかが非常に苦しかった」と振り返った。

「一番衝撃を受けた」という舞台裏の1コマも明らかにした。7月の米ハワイでの閣僚会合。途上国で関税撤廃に後ろ向きとみられていたベトナムが途中で「関税の100%撤廃」のカードを切ってきた。「振り返ると(日本の)後ろに誰もいない状況になった」と受け止めた。ベトナムの閣僚に「こんな決断をよくできたね」と水を向けると、「議論はあったが、国運をかける決断をした」と打ち明けられたという。

語気を荒らげたのは、中国への対応を聞かれたときだった。「予見可能性の高いルールに合わせてくれれば、どうぞご参加ください」と突き放した。

TPPはその先進的な内容から、実質的に世界標準となる貿易・投資ルールとなる可能性を秘める。そのルールに従うか否かのどちらかだ。そんなルールメーカーとしての強い自負が垣間見えた瞬間だった。

日本経済新聞編集委員兼論説委員

瀬能 繁

エディー・ジョーンズ

ラグビー日本代表チームヘッドコーチ

10・30(金)記者会見/司会・伊藤芳明理事長/通訳：中澤ジュリア/出席：142人/動画

さかのぼること7カ月前。同じ会見場でヤマハ発動機の清宮克幸監督が「(W杯で)ダメな結果が出れば、候補の1人として名乗り出る」と次期代表監督に立候補した。当然、翌



日朝刊の見出しどころになったのだが、それらの新聞を読んだエディーさんは、烈火のごとく怒り狂ったと伝え聞く。そ

してその矛先は清宮監督ではなく、むしろ報じたメディアの方に向いていたという。オーストラリアで生まれ、W杯ともなれば国を挙げて代表をサポートするのが当然と認識している知将にとっては、チームに波風を立てるような報道は我慢ならなかったのだらう。7、8月の北米遠征中には意に反した報道があったとして、試合後の会見を初めて拒否した。代わりに応

最後まで引き出せなかった本音

対した別のコーチを、私を含む記者団が厳しく問い詰めているほんの7、8日前で、エディーさんはスタッフと会話し、時折笑みすら見せていた。代表広報担当者から伝えられたのは「メディアへの信頼がなくなった」とのメッセージだった。

外国人監督や選手との関係づくりは、スポーツ報道に従事する者にとって、常に付きまとう課題だ。日系米国人の母と日本人の夫人を持ち、96年から日本のラグビー界と関わりを持つエディーさんでも、最後まで相互理解の及ばない領域があったように思う。W杯期間中、英字メディアに日本ラグビー協会への信頼を失ったことがヘッドコーチ退任理由の1つと語っていた彼が、会見では「新しい経験が自分に必要だと感じた」と語るにとどめた。詰め切れられなかった距離が、そうさせたと感じる。

「出る杭は打て」という言葉は、日本のスポーツを表している「コーチも学ぶ姿勢を持たないといけない」。会見でちりばめた金言は、エディーさんが日本メディアに発せられる精いっぱいという言葉だったと思う。彼が再び日本に戻って来た時には、100%を引き出す準備を整えたい。

スポーツニッポン新聞スポーツ部

阿部 令

戦後70年

小栗 康平 映画監督

11ページに関連記事

フジタの内面の哀しみとは？

10・16(金)シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」③ / 司会・倉重篤郎委員 / 出席・38人 / 動画



今なぜ藤田嗣治なのか。小栗さんによると、1つは著作権問題だという。藤田氏側の厳しい管理でなかなか映画化が果たせなかったのが、ある人の仲介でそれが可能になった。もちろん、藤田という人物に関心がなかったわけではない。

だから、制作にあたり、藤田に関する文献は日記に至るまで相当読み込んだ。騒がしいエピソードがいっぱいあった。自我が強く、個性的な生き方をする藤田がいた。だが、映画化する際にはそういった伝記的なものは避け、その内面的なものを描こうと思った、という。それは、1920年代のエコール・ド・パリで日本的な技法で大人気を博し、40年代の日本では西洋の歴史画的タッチで戦争協力画を描き、全く違う2つの時代、空間で、プロとしてひるまずに表現に携わってきた人間の哀しみみたいなものだ、という。

小栗さんの映画監督としての一貫したモチーフは、「ヨーロッパ近代を日本がどう受容したか」である。近代化が果たして日本人を幸福にしたのか。その最大の成功者に見える藤田の内面に一体どういう哀しみがあったのか。ここからは映画を見ながらじっくり考えたいところである。

企画委員 毎日新聞専門論説委員 倉重 篤郎

海外日系人の戦後

「ハーフではなくダブルです」

日本と世界をつなぐ日系人

10・26(月)同シリーズ企画④ / 司会・中井良則専務理事 / 出席・44人 / 動画



写真左から、ヘル・インドネシア・ヤカタ・海友社文化連合会理事、友社連合会理事、福文系人カタニさんとインドネシアのヘル・サントソさんの2人の二世に戦後70年の歩みを聞いた。

ナカタニさんは日本企業の現地法人社長を長く務めた。「日本から来るボスに差別されるから、日本の会社に入りたいたい日系人は今、ほとんどいない。若い世代が日本語を学ぶモチベーションもなくなるのが残念だ」と進出企業に苦情を呈した。

ヘルさんは「日系インドネシア人のダブルです」と自己紹介。父の祖国・日本と母のインドネシアの両方をよく知るから、ハーフではなくダブルだ、という。父は日本の敗戦後、独立戦争に加わった残留日本兵の1人。英雄墓地に眠る。

田中克之海外日系人協会理事長は、戦後、困窮した日本に日系人がララ物資を贈り援助してくれた、と説明した。日本と世界の懸け橋である日系人を大切にしたい。

日本記者クラブ専務理事 中井 良則

海外日系人は推定350万人もいる。毎年、世界各国から代表が東京に集まり海外日系人大会を開く。来日したブラジルのアンセルモ・ナカタニさんとインドネシアのヘル・サントソさんの2人の二世に戦後70年の歩みを聞いた。

柴田 優呼 ニュージールランド・オタゴ大学助教授

被爆者の多様な声を世界に

10・29(木)同シリーズ企画⑤ / 司会・中井良則専務理事 / 出席・40人 / 動画



戦後初期、原爆による「爆撃」「攻撃」「空襲」「空爆」といった表現があったそうだ。原爆「投下」という現在一般に使われる言葉は、投下に至るアメリカの意思と責任をほかし、原爆による民間人大量虐殺を感情的に中和する一と柴田助教授は指摘した。

専門はポスト・コロニアリズムのテキスト分析。被爆体験を描いた作品として有名なハーシーの『ヒロシマ』や永井隆の『長崎の鐘』も、原爆を「宇宙や太陽の力」と結びつけて使用を正当化したトルーマン声明に通じる言説構造を持つ、と主張。被爆者の多様な声を、日本のためではなく世界のために、日本の閉じた言語空間の外で、伝えていくことの重要性を力説した。

米大統領が広島を、日本の首相が真珠湾をそれぞれ訪問し真の和解を、という松尾文夫氏の提案についての質問に「良いと思う。ただオバマ大統領は被害者に祈りを捧げればよく、日本や日本人に謝る必要はない」と述べ、被爆者と日本人一般を明確に分けた。

会見後、著書『ヒロシマ・ナガサキ 被爆神話を解体する』を通読した。被爆や強制収容所などで「むきだし」の生を強いられた人々の体験を代理表象する困難を、強く意識しているのが印象的だった。

共同通信編集・論説委員 船津 靖

トルコ人ジャーナリストを囲む会

シリアの隣国 トルコ再び不安定化か

9・30(水) 囲む会 / 司会: 杉田弘毅委員 / 出席: 56人 / 動画



混乱が続くシリアに接し、問題解決への役割が期待されるトルコ共和国だが、国民の20%を占める少数民族クルド族と政権との和平プロセスに再び暗雲が立ち込めている。

会見したトルコの新聞記者ら6人は、この危機に際しエルドアン政権がメディア弾圧をしていると訴えた。「クルド問題は和平に向かうかが見えたが、再び暴力の応酬に向かっている」「政権を批判したら解雇された」「過去1年間に1000人以上が起訴された」等々。

エルドアン大統領は大統領権限強化を図り、クルド族議員や与党(公正発展党)内部からも批判が続出。今年6月の総選挙では与党が過半数を割り、11月1日に再選挙が行われた。隣国シリアでは、アサド政権・反政府勢力・IS(イスラム国)等入り乱れて内戦が続く。欧米・アラブ連合軍に続きトルコも空から参戦。ロシアも空爆を始め、多くの難民がヨーロッパに脱出している。こうした中、首都アンカラでは10月、爆発テロで97人が死亡するなど不穏な空気に包まれている。

山陽放送出身 原田 健男

*ゲスト名はウェブサイトに掲載

神宮外苑と国立競技場を未来へ手わたす会

発し続けた市民の疑問の声

10・1(木) 研究会「リセット東京五輪」② / 司会: 川戸恵子委員 / 出席: 31人 / 動画



2020年東京五輪・パラリンピックの準備段階で起こった国立競技場建設とエンブレムに絡むトラブル。巨額の総工費から白紙撤回されたメインスタジアムの建て直し問題に、著名建築家などとともに一般市民の目線で疑問の声を上げ続けた。この活動がなかつたら、メディアへの問題浸透は遅れたかもしれない。

共同代表は作家の森まゆみさん(右)と建築家の大橋智子さん。一昨年発足した会は、都市の貴重な緑地である神宮外苑の緑を壊さない、1964年東京五輪の記念碑的建造物である旧国立競技場を改修して使うことをめざした。神宮外苑の歴史、環境に根差して、さまざまな疑問、提言を發した。しかし、建設主体の日本スポーツ振興センターや文科省に無視され続けた。一度回り出したら止まらない日本の公共工事の悪弊。森さんは「日本は『聞かない』民主主義国家」と皮肉った。「国家の力が強くて一方的に進められてきたが、市民の考えを組み入れながら進めるべきだ」とあるべき姿を語る。結果的に、五輪開催という巨大国家プロジェクトも、市民の声を無視できなくなったなら、それは日本国民にとって東京大会の意味あるレガシー(遺産)と言えるかもしれない。

共同通信編集委員兼論説委員 小沢 剛

ルカス・カラツオリス 駐日ギリシャ大使

「われわれは危機の最中にある」

10・6(火) 記者会見 / 司会: 福本容子委員 / 通訳: 西村好美 / 出席: 48人 / 動画



財政破綻とユーロ圏離脱をひとまず回避したかと思えば、今度は難民問題だ。危機の震源地として、地中海の玄関口として、ギリシャ情勢は日本でも盛んに報じられるが、理解し難い点も多い。「ギリシャは危機の最中にある」と切り出したカラツオリス氏は、母国の実情を丁寧解説した。

公約を守らなかったチブラス首相が9月の選挙で再び勝利したのはなぜか。「有力な対抗馬がいなかった」との指摘は確かだろう。だが肝心なのは「改革が必要」という共通認識がギリシャ国民に出来上がっている」との分析だ。旧体制を批判する若きリーダーが国民の負託を受け続けているのは、かすかな望みにかける国民の窮状を映している。日本のメディアには財政や難民だけでなく「安全保障にも目を向けてほしい」と注文をつけた。にわかにはピンとこないが、列強に翻弄された苦い歴史と、「不幸なことに黒海や中東・北アフリカといった不安定な地域に囲まれている」という今の危機感に由来するのだろうか。同じ島国として周辺国の脅威にさらされている日本との共通項は財政問題に限らない。今後の動向も丹念に追わなければいけない。そう感じさせられる会見だった。

日本経済新聞国際アジア部 鳳山 太成

竹花 豊 全国万引犯罪防止機構理事長

高齡化、換金方法の多様化 社会の変化反映する万引犯罪

10・8(木)記者会見/司会：杉尾秀哉委員/出席：37人/動画

竹花豊氏は、東京都の副知事も務めた異色の元警察官僚である。その竹花氏が理事長を務める全国万引犯罪防止機構が、今年で設立10年を迎えた。竹花氏によれば、年間の万引被害総額は推定461.5億円。全刑法犯の認知件数低下の傾向が続く中、万引の占める割合は増える一方で、今や10件に1件に上る。



その万引犯罪が近年、新たな展開を迎えている。1つは高齢化、そしてもう1つは社会の変化による換金方法の多様化だ。かつて万引は「青少年の犯罪」というイメージが強かったが、検挙数では3年前から高齢者が青少年を上回った。また新古書店やネット通販の普及もあり、大量万引や組織犯罪の横行も目立つ。

竹花氏は、「万引は社会を腐敗させる病巣だ」と指摘する。問題解決には自助(小売店)、公助(警察・司法)、共助(機構)の機能強化と、相互連携の充実がカギになる。そして何より重要なのは、「万引犯罪を決して許さない」という、社会全体の強い意思であろう。

企画委員 TBSテレビ報道局解説室長 杉尾 秀哉

オランダの労働市場改革に学ぶ

改革から逃げない勇氣求める

10・14(水)記者会見/司会：実哲也委員/通訳：長井鞠子、佐藤雅子/出席：63人/動画



日本ではパートなどで働く非正規社員の比率が高まり、雇用の不安定化が問題になっている。だが、非正規比率が日本より高いオランダでは、それを問題視する声はほとんどないようだ。違いはどこにあるのか。欧州の大手人材サービス会社、ランスタッドの幹部であるムントツ氏(写真中)は、賃金や年金などの待遇面で差別がないことや、社会的にも非正規労働者の地位は低いというイメージが薄い点を挙げた。非正規雇用が女性の就業率向上に有効な道筋と受け止められていることもあるようだ。

非正規の増加も含む「柔軟な労働市場」は、世界の変化に即応して経済を強くし、雇用を創出する上でも重要だと強調したのは、オランダのバルケネンデ元首相(右)だ。首相在任中に社会保障・雇用改革を主導した経験を率直に語ってくれた。働く意欲を阻害する給付の削減など痛みも伴う改革を実施した。政治家に必要なのは、問題から逃げない勇氣と改革の必要性を丁寧に説明する努力だと訴えた。日本の政治家に最も求められる点だろう。

企画委員 日本経済新聞論説副委員長 実 哲也
*写真左は村上由美子・OECD東京センター所長

フランク・ジャヌージ ミャンマーフィールド財団理事長

忍耐強い楽観主義者

10・15(木)記者会見/司会：秦野るり子委員/通訳：長井鞠子/出席：40人/動画



米民主党きつてのアジア通の1人。流動化する東アジア情勢についての、包括的でよく整理された分析からは、忍耐強い楽観主義者の側面がうかがえた。

台頭する中国には「環境破壊」「エネルギー安全保障」「高齡化」「貧富の格差」「少数民族」「汚職・腐敗」の6匹の竜(克服すべき課題)が潜んでいるという。「これらの竜を退治して中国を成功した国に導くことが日米共通の利益になる」と強調、既存の安全保障協力体制の強化に加えて「中国を敵視せず、共通の土俵に引き込んでいくリバランスのリバランスが必要だ」と結論づけた。

北朝鮮の核開発については、オバマ政権の戦略的忍耐政策は明らかに失敗だったと率直に認めた上で「時間はかかっても核開発をやめることが彼らの利益になるという意思決定ができるような環境を形成していくことが重要だ」と述べた。

かつての上司だったバイデン副大統領の大統領選出馬の可能性について問われると「彼はとても家族を大切にしている人だ」と切り出し、ワシントンのオフィスから遠く離れたデラウェア州の自宅に戻るバイデン氏に付き合われて、帰宅が深夜になっても止まらなかったエピソードも披露してくれた。

NHK解説委員室解説主幹 出石 直

岡 慎一 第29回日本エイズ学会学術集会・総会会長

予防と治療の大きな成果を反映

10・15(木)記者会見「HIV/エイズ」/司会：宮田一雄委員
/出席：22人/動画

今年の日本エイズ学会は11月30、12月1日に東京で開かれる。わが国エイズ診療の第一人者とされる岡会長が選んだテーマは「予防、予防、予防、そして予防」。やや意外な印象だが、早期治療により(1)HIVに感染した人のエイズ発症を防ぎ、長期生存が可能になった(2)体内のウイルス量が減り、他の人への感染のリスクを大きく下げられることが確認された―という最近の研究の2大成果を踏まえているという。



世界保健機関(WHO)はその研究成果をもとに、12月発表予定だった治療ガイドラインのうち2点を3カ月前倒しして先行発表している。1つは、免疫

細胞が一定レベルまで減少するのを待つのではなく、感染が分かっただけで直ちに治療を開始すること。もう1つは、感染リスクの極めて高いと思われる人に限り、感染していても抗レトロウイルス薬の曝露前予防投与(PREP)を認めることだ。今学会ではこれらの研究分野の第一人者を海外から招き、最新の研究成果を聴くという。

学会前後の期間には「東京エイズウィークス」として都内でさまざまなイベントも企画。組織委員の生島嗣さんから、その概要も紹介された。

企画委員 産経新聞特別記者 宮田 一雄

マリナ・シルバ 元ブラジル環境相

人類に逃げ場はない

10・16(金)記者会見/司会：川上高志委員/通訳：竹原ミチコ/出席：38人/動画



「現在の世界の開発モデルは、環境面、社会面など多くの側面で持続可能ではない。人類は早急に、より持続的な開発モデルを手に入れなければならない」

ブラジル・アマゾンの貧農の家に生まれ、苦学の末にブラジル史上最年少の上院議員となったことで知られる。アマゾンの熱帯雨林保護活動の最前線に立ち、ルラ政権時代には環境相も務めたシルバ氏。闘志を内に秘めた静かな語り口で、現代の文明が直面する危機の実相を描いてみせた。環境の危機、社会的な危機など多くの危機が折り重なり「現代文明は存立の危機に立っている。一部の国や政治家だけでなく人類全体が取り組まなければならない問題だ」と訴えた。

2030年までに国際社会が達成をめざす17項目の「持続可能な開発目標(SDGs)」が採択され、年末にはパリで気候変動枠組み条約会議が開かれる。今年も、持続可能な社会づくりへの歩みを速める年としなければならない。

「過去にも滅んだ文明はあったが、現代文明の危機は地球上の全ての場所で、全ての人間を網羅している。われわれに逃げる場所はないのだ」という言葉が印象的だった。

共同通信編集委員 井田 徹治

奥野 長衛 J A 全中会長

根っからの協同組合主義者

10・19(月)記者会見/司会：川村晃司委員/出席：71人/動画



環太平洋経済連携協定(TPP)大筋合意や農協法改正にどう対応するのか。8月にJA全中の会長に選任され、日本記者クラブで初めて会見する奥野さんは、何を言うのだろうか。目先の取材テーマを追いかける記者は、面食らったに違いない。会見の大部分を「自己紹介」に費やしたからである。もちろん質疑応答ではきちんと目先の問題にも答えていた。三重県伊勢市出身で、農家の跡取りとして育った。関西大学で生活協同組合活動にのめり込み、協同組合とは何かを学んだ。

「協同組合とは、組合員と共に事業を展開するもの」。奥野さんの行動の原点であるこのことを会見で伝えたかったのだろう。農協は役員のための組織ではなく、政治運動をする組織でもないという考え方は、ここから導き出される。JA全中の会長選挙に立候補したのは、TPP反対運動で、数千人の大集会を開き政治家に圧力をかける運動に疑問を抱いたからだという。「どの政権とも対決するつもりはない。対話でしか、ものごとは前に進まないからだ」

語り口は穏やかだが、長い協同組合活動で培った芯の強さを感じさせる爽やかな会見だった。

朝日新聞出身 村田 泰夫



朴正鎮 津田塾大学准教授

対中認識の違いを理解すべき

10・22(木)研究会「中韓接近と今後の日韓関係」/司会・山本勇二委員/出席・70人/動画

韓国は中国への傾斜を深める。貿易、観光客の増加、中国が持つ北朝鮮への影響力によるものだが、一方で「日本離れ」は進む。韓国人研究者はどのように見ているのか。



朴准教授によれば、韓国は米中両国の間でいかに均衡を取り、朝鮮半島での危機を回避するか、常に難しい選択を迫られている。韓国はまず、外交、安全保障の両面で米国との連携を固める。中国とは対立するのではなく、むしろ中国が成長を持続し国際社会のルールに適応するよう促す、関与政策が必要だと提言した。朴権恵政権ではなく、今後、革新系政権ができて、このような路線は変わらないと予測する。

日本と韓国では、中国に対する認識が異なる。それを十分に理解する必要がある。日本側は中国の拡大抑止を強調し中韓接近を批判するが、韓国が直面する現実を見ていないと指摘した。では、韓国国民は中国に親近感を持つのか。朴准教授によると、中国の大衆文化や小説が人気という現象は見られず、小説やポップスなど文化面では圧倒的に「日流」だという。韓国はどこかでバランスを取っているのかもしれない。

企画委員 東京新聞論説委員 山本 勇二

山口 那津男 公明党代表

対韓・対中外交で「地ならし」強調

10・23(金)記者会見/司会・星浩委員/出席・92人/動画



公明党の山口那津男代表が10月に韓国、中国を訪問。安倍晋三首相の対韓・対中関係の改善に向けた「地ならし役」を果たしたと胸を張った。

韓国では朴権恵大統領と会談。「慰安婦問題を人権問題として捉えている。早期解決を望む」という率直な意見を聞いた。安倍首相との初の首脳会談にも前向きな姿勢を見せたという。中国では、習近平国家主席と短時間の立ち話。「東京の桜をご覧いただきたい」と来春の訪日に水を向けたら、うなずいたというエピソードも披露した。

政権与党として集団的自衛権を容認する安全保障法制を推進した公明党では、支持組織である創価学会の一部から不満も漏れる。「平和の党」として韓国・中国との関係回復に力を注いでいる姿勢をアピールし、支持組織の理解を得たいという狙いもあるようだ。

消費税率再引きの時に食料品への軽減税率を導入することも、支持組織からの強い要望だ。「軽減税率で痛税感を和らげる必要がある」と強調したが、財源については「今後、協議していく」と述べ、手探りの状況だ。山口氏にとっては、安保法制に続いて、頭の痛い問題である。

企画委員 朝日新聞特別編集委員 星 浩

ハナア・シンガー ユニセフシリア事務所代表

ヨーカー・ブランド ユニセフ本部事務局次長

シリアの子ども危機を身近に受け止めて

10・23(金)記者会見/司会・土生修一事務局長/通訳・池田薫/出席・61人/動画



第2次大戦以来最悪の人道危機となったシリア内戦。2014年9月からユニセフの現地事務所代表を務めるシンガー氏(左)は「シリアは子どもにとって世界で一番危険な場所だ」と述べた。

シリアの国内避難民は約800万人に上り、560万人の子どもが人道支援を必要としている。欧州へ逃れる膨大な数の難民に注目が集まるが、「最大の危機はシリア内部で起きている」と指摘。約500万人が深刻な水不足に苦しんでいるほか、半数以上の病院が破壊された。北部アレッポでは猛暑のさなかに41日間の断水が続いたという。

シリア支援に必要とする9億ドル(約1080億円)のうち、各国の拠出額は半分にとどまる。厳しい冬が近づき、残りの資金が集まらなければ「救えない子どもも出てしまう」と窮状を訴えた。シンガー氏は会見でこう呼びかけた。「自分の子どもを寝かしつけるときに、数百万人のシリアの子どものことも忘れないで」。国際社会や各国政府はもちろんのこと、市民一人一人がこの問題を身近に受け止めてほしいというメッセージだった。

毎日新聞外信部 小泉 大士

イシュトバーン・セルダヘイ

駐日ハンガリー大使
10・21(水)記者会見／司会：脇祐三委員
／出席：54人／動画

マグヌス・ローバツク

駐日スウェーデン大使
10・21(水)記者会見／司会：石川洋日本
記者クラブ企画担当部長／通訳：森岡幹
予／出席：43人／動画



フェンスを築き催涙弾まで使
い、難民を入国させまいとする
「悪役」のイメージが強かったハ
ンガリー。セルダヘイ大使(左)の
会見で、話はそんな単純ではない
と納得した。域内で最初に入国し
た国で難民申請し、認定され滞在
が認められるという欧州連合
(EU)のルールを守ろうとしただ
けだという。しかし、難民らは国
境審査を免除するシェンゲン協定
を利用してEU域内の国々を通過
し、駅などに殺到し不法滞在。ドイ

ツめざして徒歩で
移動し畑にまで入
った。
秩序を取り戻す
ため、フェンスを

難民殺到に直面する欧州各国



審査を合法的にで
きるようにしたの
だという。

「命を救うこと」を優先するスウ
エーデン政府の方針を示す一方で、
難民や移民の受け入れに反対する政
党への支持率が約17%に上り、世論
も分かれつつある事情も説明。難民
施設への放火についての質問には
「詳細が分からず具体的なコメント
はできない」と述べるにとどまっ
た。

「私と同じものを」。会見直前のゲス
ト控室から日本語で飲み物を注文す
る声が聞こえてきた。「今日は外国
人ゲストのはずだが」と控室に入
ると、4人の外国人が座っていた。
長身の紳士が「今日はよろしくお
願いします」と自然な日本語で話し
かけてきた。ハンガリーのイシュト
バーン・セルダヘイ大使(56歳)だ。
大使は若い頃、日本語を独学、取材で
訪欧中だった作家の宮本輝さんの通

会見翌日、移民を狙ったとみられ
る学校襲撃事件が起き、反移民感情
への懸念が現実の悲劇になってしま
った。

東京新聞・中日新聞論説委員

熊倉 逸男

「日本語能力は『外交力』」

「ホットコーヒーをお願いします」
「私も同じものを」。会見直前のゲス
ト控室から日本語で飲み物を注文す
る声が聞こえてきた。「今日は外国
人ゲストのはずだが」と控室に入
ると、4人の外国人が座っていた。
長身の紳士が「今日はよろしくお
願いします」と自然な日本語で話し
かけてきた。ハンガリーのイシュト
バーン・セルダヘイ大使(56歳)だ。
大使は若い頃、日本語を独学、取材で
訪欧中だった作家の宮本輝さんの通

の目に触れないなんてと、妙な義
憤を覚え記事にした。

私と小栗監督の「泥の河」

小栗康平監督と出会った日は、よ
く覚えている。1981年正月、東
京・銀座のホールで『泥の河』の試
写を見た。こんな映画を作る監督の
顔が見たいと思いい、四谷の小さなプ
ロダクション事務所に押し掛けた。
雨の日で、監督は不在だった。
帰るまで待つことになり、プロダ
クションの木村元保さんとよもやま
話になった。本業は鉄工所経営だが、
映画好きが高じ、独立プロを起こし
小栗監督に出資した。映画はできた
が上映が決まっていなくて聞かされ
た。『泥の河』のような映画がフア

訳を務めたことが縁で来日し、宮本
家に下宿して神戸大学で明治維新を
学んだ。その経歴を生かして、現在、
2度目の駐日大使を務めている。驚
いたのは、同行の大使館員3人全員
も日本語の使い手だったことだ。「東
京駐在の外交官にとって日本語能力
は外交力。うちの大使館の外交力は
高いですよ」。大使は胸を張った。
この日は、難民問題で国際的困難
を受ける母国の立場を説明する難し
い会見だったが、質疑応答も含め全
部日本語でこなし、高い「外交力」
を示した。 事務局長 土生 修一

以来『眠る男』が完成すると「キネ
マ旬報」で監督と対談する羽目にも
なった。その監督の10年ぶりの新作
が『FOURTEEN』になった。

読売新聞出身 西島 雄造



40 記者ゼミ どう届けるか ネット時代の ニュース

おつむら
あつむら
藤村 厚夫
スマートニュース社
執行役員

「世界中の良質な情報を必要な人に送り届ける」。日本のニュース系キュレーター・スマートフォンを牽引するスマートニュース社。執行役員の藤村さんが繰り返し語った社の目的、問題意識は、新聞、テレビメディアと全く変わらない。ただ、今の時代に最も適した「アプリ」というプラットフォームを使って、その命題を純粹に追求している。

取材は行わず編集部は存在しない。協力する新聞やテレビ、雑誌の記事をアプリで閲覧できるようにする。どのニュースを扱うかは、「機械学習」や「自然言語処理」の技術を使った人工知能・アルゴリズムが判断する。

藤村さんは最新のデータを示しながら、今の時代のニュースの届け方について語った。

10代では、45%がネットをスマホのみで利用。さらに動画の視聴は、パソコンよりスマホの方が多いとい

うデータも示し、ネット・モバイルの時代が加速しているとした。特に強調したのは、スマホが「パーソナルなメディア」になっている点だ。スマホで動画を見る環境の1位が、ベッドや布団の中だという。さらに、トイレや信号の待ち時間が1分、電車待ちや注文待ちが3分、人待ちは5分など、ちょっとしたスキマ時間にどう触れてもらえるかが、ニュースの命運を分けるとした。

また、今後はネットニュースの舞台がソーシャルからメッセンジャーへと移行していく見通しも示した。

一方、ネットメディアが共通に抱える収益の課題に関しては、「閲覧に課金を検討している」としながら「根本的な解決策はなく、複数の収益モデルを組み合わせるしかない」とした。

読者、視聴者の「心に届く」ニュースとは何か。ジャーナリズム、メディアに身をおく者が常に問いつけているテーマに直結した刺激的な講演だった。

NHKネット報道部チーフプロデューサー
蔵重 龍
10・5(月)「ミレニアル世代と向き合う」
プラットフォームの視点／司会・橋場義之特別企画委員／出席・参加28人＋
ネット視聴7人



41 記者ゼミ 激変する 若者の情報行動 既存メディアには 依然高い信頼も

あきもと
よしもと
橋元 良明
東京大学大学院
情報学環教授

米国で今年、世代別労働人口で最大に躍り出たミレニアル世代。生まれた時にはネットがあった彼らのメディア消費は、上の世代と大きく異なる。国内ではどうか。日本人の情報行動を、20年にわたり丹念に調査してきた橋元氏のデータ

は、その疑問に明快に答えてくれた。

「若年層のテレビ離れが、この5年で急速に進み、利用時間でネットに逆転された。2012年がターニングポイントだった」と橋元氏。背景には爆発的に広がるモバイルのネット利用があるが、実は単純なカニバリズム(浸食)ではないという。

「若者はながら利用が一般的で、しかも減少が続く在宅時間で、消費すべきメディアは多様化している。結果的にテレビの分配時間が減った形で、テレビ視聴が増える高齢者層との差は拡大している」と指摘する。内と外で、多メディアと接触する現代の若者像が垣間見える。

だが、10代がスマホで使う時間の6割は、ソーシャルな仲間内のコミュニケーションだ。社会の出来事や公共情報への関心は低く、無料のネット

ニュースさえ読まない。「大量のテキストを消費してはいるが、これが主観的世界の個別化を加速する。ネットでは大声の極端な意見が通る傾向もあり、偏向した意見がはびこる危険性もある」と危惧する。

救われたのは、当の若者もネットを全面的には信用していない点だ。『信頼できる情報を得る媒体』を選ばせると、1位テレビ、2位新聞、3位ネット。新聞社の人間としてはやや納得がいかないが、「ふだん触れていない新聞を、択一ではそもそも選びにくい」そう、個別の質問だと信頼度は1位となる。

依然信頼のブランドだが、若者にとっては縁遠い存在となってしまう新聞。彼らへのアプローチのヒントが、ここにあるような気がした。

読売新聞東京本社メディア局専門委員
松井 正
10・26(月)「ミレニアル世代と向き合う」
新しい読者像／司会・橋場義之特別
企画委員／出席・参加24人＋ネット視聴
16人

TPP大筋合意

太田 泰彦（日本経済新聞社）

20年前と変わらぬ通商交渉取材 日本のメディアは進化を

通商交渉の取材方法は20年前も今も変わらない。交渉現場で立つて待ち、出てくる当局者をつかまえては「ひと言」を聞く。口調や表情のわずかな変化を読む。徹夜の協議なら徹夜で待つ。ひたすら待つ。

米国アトランタで開いた閣僚会合で環太平洋経済連携協定（TPP）交渉が、ようやく決着した。9月末から2日間の予定だった閣僚会合は、延長に次ぐ延長となり、霧の中を手探りで進むような交渉が続いた。

昼も夜もない現場

「終結宣言」に記者団も拍手喝采

交渉開始から5日目。いったん午後4時に決まった記者会見の時刻が変更され、さらに先送りしたかと思うと、ついには「日時未定・追って連絡」に変わった。もう昼も夜もない。体内時計は完全に狂っていた。眠れない一夜を過ごし、翌10月5日午前9時20分。記者会見場で米通商代表部（US TR）のフロマン代

表が「交渉終結」を宣言すると、喝采が1分以上も続いた。お互いを祝福する12カ国の代表団だけではないうつれた顔の記者たちも拍手していた。その半分は頑張った自分自身へのねぎらいだったに違いない。寝ずに立ち番を続けて、私たち記者は確かに頑張ったけれど、報道の中身はどうだっただろう。TPPという怪物は、取材をすればするほど正体が分からなくなる。

豚肉の関税が最大の焦点だとみなす意見もあれば、バイオ製剤の知的財産権こそ最重要だとする立場もある。関税撤廃の自由化率にこだわる主張もあれば、国内政局や株価への影響を優先する思考法もある。

取材する相手と、眺める視座によって、TPPはいかようにも姿を変える。分野ごとに相手国と対峙する交渉官ですら、12カ国全体の状況は正確につかめていなかったはずだ。各国の代表団の中には、報道を利用しようと偏った情報を流す交渉官

もいる。群がる日本人記者を見下すかのように、不遜な態度をとる政府高官もいる。自らの解説に陶醉する冗舌な報道官もいる。

集めたいびつなパズルの部品を組み合わせて、とてつもなく奇妙な形のTPP像ができてしまった場面はなかっただろうか。取材競争が高じて、重箱の隅をつつくような見出しが躍ったこともある。読者・視聴者が本当に知りたい事実、そしてTPPの本質を伝えてきただろうか。

無言でたたずむ日本人記者 外国では異様？

通商交渉の取材ほど、日本国内と海外のメディアの報道が異なる分野はない。交渉現場に集結する報道陣の人数も、交渉12カ国の中で日本が



TPP交渉が閣僚会合で大筋合意し、共同記者会見する各国代表（10月5日/米アトランタ/共同通信写真部・鷲沢伊織撮影）

群を抜いている。

当局者の「ひと言」を聞き漏らすまいと、ライバル社の気配を気にしながら建物の隅々に立ち番の要員を配する取材方法は、80年代末の日米構造協議の頃と全く同じ。アトランタの街でも、同じ場所に何人もの日本人記者がたたずみ、無言でじっと待ち続けていた。

その光景は外国の政府関係者や記者の目に、異様に映っただろう。誰か代表で1人いれば十分なはずだ。私たちは目先の競争に目を奪われ過ぎ、頑張ること自体を自己目的化してはいないだろうか。その結果、視野狭窄に陥り、情報源の思惑に乗せられたのでは本末転倒だろう。

日米自動車協議など相手国が1カ国、対象分野も1つという通商交渉の時代は終わった。停止中の世界貿易機関（WTO）交渉を除けば、TPP取材は、複数国が複数分野を突き進む初めての経験だった。

通商交渉の仕組みが進化するのなら、取材も進化しなければならぬ。立ち番を20年続けた通商記者としての、私の率直な反省である。

おた・やすひこ▼1985年入社
シントン支局 経済部 フランクフルト支局などを経て 2004年から論説委員兼編集委員 1面コラム「春秋」担当 15年4月からシンガポール駐在

日本人同時受賞 科学部の10月

増満 浩志(読売新聞東京本社)

準備が大事だが…冷や汗のノーベル賞報道

毎年10月は、科学ニュースが最も注目される時期の1つだ。昨年に続いて今年も日本人のノーベル賞受賞が決まり、連日、号外が発行されるなど、大いに盛り上がった。

科学部にとっては、意気が上がると同時に、最も怖い時期でもある。2000年の白川英樹さん、02年の田中耕一さんのように、全く準備をしていなかった人が受賞することがあるからだ。

そんな「想定外」ができるだけ起きないようにと、毎年、「受賞の可能性がある」と考えた研究者の「候補者リスト」を作り、業績の取材など紙面作りの準備をして発表日を迎える。しかし、生理学・医学賞、物理学賞、化学賞の3賞を合わせると、候補者は何十人にも上る。

全ての候補について万全の準備を整えるほどのマンパワーはない。優先順位をつけて取材を進めた結果、準備不足のまま発表日を迎えてしまう候補者が何人も出てくる。そして、

発表時刻が近づくにつれ、「準備不足の候補が受賞するんじゃないか」と、不安が募る。

集中できたのは1週間前から
リスト上位の2人にホッ

「それならば、今から来年の準備を始めれば、もつと安心して臨めるじゃないか」。毎年、10月のノーベル賞発表ウィークが終わった時は、そう思う。昨年もそうだった。ところが、「まずは12月のノーベル賞授



受賞が決まり、東京大学の記者会見で五神真学長と握手を交わす梶田さん(右/10月6日/読売新聞・前田尚紀撮影)

賞式に注力しよう」新年の特集紙面を作り終わったら始めよう」などと、目前に迫る仕事をどうしても優先してしまう。「震災4年の企画」「戦後70年特集」「原発再稼働」。ノーベル賞の準備を後回しにする口実は、いつまでも続く。

気がつくくと、9月半ばを過ぎても、大勢の科学部員が「御嶽山噴火から1年」の紙面作りにかかりきりになっていた。その中心に、「ニュートリノ」の担当記者も「イベルメクチン」の担当記者もいた。

そんなわけで、今年、科学部がようやく「ノーベル賞」に集中できたのは、発表前の最後の1週間。私の印象では、準備にかけることのできた時間が、東日本大震災の年と同じくらい少なかった。

幸いなことに、今年の受賞者は、候補者リストのかなり上位にいた2人だった。生理学・医学賞の大村智さんも、物理学賞の梶田隆章さんも、数年前から「有力候補」と考えて準備を重ねてあった。

特に物理学賞は、過去の授賞の実績から「今年は宇宙分野か素粒子分野」と推測し、「日本人が今年受賞するとしたら、ニュートリノ振動をおいてない」と判断。忙しい合間を縫って、6月に科学面で梶田さんら

の業績を取り上げてあった。

難解だったニュートリノ
図解に知恵絞る

日本人のノーベル賞受賞が決まると、翌日の朝刊は多くのページを使って報じることになる。どのページにも写真やイラストが求められる。ニュートリノのように極めて専門的な業績の場合、文章でどんなにかみ砕いて説明しても、なかなか多くの読者に「分かった」と感じてもらうにくい。図解が非常に重要だ。

6月の科学面では、どのように図解すれば分かりやすいのか、知恵を絞って、大きなイラストを作成した。その経験があったので、授賞が発表された10月6日の夜は、業績を詳しく解説する最も重要なイラストを、短時間で用意することができた。「準備」の大切さをあらためて強く実感した。

よし、今度こそ早めに来年の準備に取りかかろう。12月の授賞式が終わったらすぐに。いや、「震災5年」の企画を終えてからになるのか……。

ますみつ・ひろし▼1987年入社
ワシントン支局などを経て 今年4月から
科学部編集委員



■ 葦崎大村美術館で八ヶ岳をバックにインタビューに答える大村智さん。美術館は大村さんが生家近くに建設した(2012年11月/山梨日日新聞社提供)

大村智さんノーベル賞受賞 山梨発 前島 文彦(山梨日日新聞社)

「さとっちゃん」の快拳 過去にない吉報に沸いた日

顔見知りの仲間が集まる寄り合い

で酌をしながら、よもやま話に耳を傾ける腰の低い男性。ノーベル医学生理学賞の受賞が決まった、山梨県葦崎市出身の大村智さん(80)の故郷での姿だ。数カ月一度開かれる寄り合いの名前は「同事会」。「みんな平等につきあう」という意味を込めて、大村さんが名付けた。親しい間柄の友人にとっては、いくつになっても「さとっちゃん」。本人もそ

れを喜ぶ。

10月5日夜、人口85万人足らずの県からノーベル賞受賞者が誕生するという、過去にない吉報がもたらされた。地元紙としては、功績の意義や本人の動向はもちろん、郷里やゆかりのある人たちへの取材が肝となる。取材を下支えしたのは、受賞決定以前に掲載した300本以上の記事。予定稿に加えて、連絡先一覧を基に関係者にコンタクトを取り、紙面展開した。

「原点は山梨」 ガードナー賞でもエピソード

化学者、教育者、経営者、スポーツマン、篤志家。いくつもの顔を持つ大村さんだが、郷里で耳目を集めるのは、事あるごとに「原点は山梨」と語り、人を大切にする人格者としての側面だ。

今年7月に帝国ホテルで開かれた、ガードナー賞の受賞を記念した祝賀会でもそうだった。同事会から

招かれた7人が通されたのは、最前列の席。ノーベル化学賞を受賞した野依良治氏や学校法人理事長ら並み居る人物が座っていた。「こっちは田舎のおっちゃんばかりで、偉い人に囲まれて飯がのどを通らなかつた」とは参加者の弁。大村さんは「遠くから大切な友人が来てくれたのだから」と笑顔で答えたという。

ノーベル賞の受賞理由は「寄生虫が引き起こす感染症に効き目を示すイベルメクチンを開発。オンコセルカ症やリンパ系フィラリア症に劇的な効果を発揮した」という内容だった。オンコセルカ症はブユを媒介した寄生虫によって引き起こされる、アフリカの風土病。河川盲目症の別名があり、最悪の場合、失明する。

しかし、この解説では少々難しい。取材先で「大村先生というの偉い人らしいけど、何をした人なの?」と聞かれることもある。そんな時は「たとえて言えば、日本住血吸虫症の特効薬を開発したようなものです」と答える。

風土病に苦しめられた地域に 生を受けた研究者として

日本住血吸虫症。山梨ではシンブルに「地方病」と呼ばれる風土病だ。河川に生息している宮入貝を中間宿

主として、オンコセルカ症と同様、寄生虫が人間の体内に侵入する。発熱やぜんそくに始まり、肝臓や脳の機能も低下。腹部が異様に膨れて死に至る。年配者にとっては、その名を聞いただけで震え上がる、という病だった。1996年の終息宣言まで、県民を苦しめ続けた。

大村さんの郷里である葦崎市も、指折りの有病地だった。「嫁に行くなら買ってやるぞや、経帷子に棺桶」という差別的な俗謡さえあった。水田や河川に入らなければ罹患しないが、それでは食うに困る。農民は死を覚悟して田んぼに足を踏み入れた。大村さんも農家の出。だから、先のような説明をすると、相手は「大したものだ」と得心がいったようにうなずく。

98年の本紙インタビューで大村さんは「新物質を見つけたことよりも、人の役に立つかどうかを考えた結果」と述べた。風土病に苦しめられた地域に生を受けた研究者が「人の役に立ちたい」と研究を重ね、遠く離れたアフリカの風土病の特効薬開発に寄与した。その意味でも、山梨では今回の受賞は重みがある。

まえしま・ふみひこ▼2000年入社
社会部 政経部などを経て 10年から企
画報道グループキャップ

コンファームはトップの口から

高島益郎外務次官の思い出

井芹 浩文



いせり・ひろふみ

1947年生まれ 69年共同通信入社 政治部記者 ワシントン特派員 総合選挙センター長 論説委員長などを務め2007年退社 現在 崇城大学教授 共同通信客員論説委員 著書に『派閥再編成』『総理のリーダー術』『憲法改正試案集』など

記者になったら誰でもあこがれるのがトクダネ記者だが、これには縁遠かった。努力不足、力量と見切るしかあるまい。そういう意味で、この欄を依頼されたときは正直言っ

困った。書いた話に大したトクダネはないし、まして書かなかった秘話などあるはずがない。それでも、その程度の話かと言われそうなのを承知で書いておくのは、後輩記者たちの参考になればとの思いからだ。

◆意を決して高島次官に当てる

ほとんどを政治記者で過ごしながら、会社から唯一もらった編集局長努力賞は、日本の政変ならぬ、韓国の政変情報に対してだった。

情報がもたらされたのは1980年8月15日、金曜日の午前10時40分ごろだった。前日の14日には金大中

氏の初公判が終わって韓国情勢も一段落と、ほっとしていた矢先。国会は開かれておらず、夏休み気分の状態でもあった。

外務省キャップの野上浩太郎さんに社会部デスクの片岡清さん(故人)から「明日16日に崔圭夏大統領が辞任を発表するらしい」との情報が伝えられ、野上キャップから「確認してくれ」との指示を受けた。

私はすぐにアジア局幹部(誰だったかは思い出せない)のところへ跳んで行ったが、色よい返事はなく、あきらめかけた。そのとき、頭をかすめたのが前年の79年12月に盧載鉉国防相が突然、解任されたときのことで。まだ、それがニュースとして報じられていないとき、高島益郎外務次官が定例懇談の席で「盧国防相も解任されたらしいですね」とポツ

リと漏らしたことを思い出した。

そうか、この種の外国首脳の人事情報は、知っていても下の人は出さない。直接、高島次官に当てるしかない。意を決して次官室前で待っていると、たまたま所用で出かける次官をつかまえることができた。情報をぶつけると、気が抜けるほどあっさりコンファームしてもらえた。

◆誤報にならないかとびくびく

直ちに帰って出稿したが、次の原稿だった。

「政府筋が十五日明らかにしたところによると、韓国の崔大統領は極めて近い時期に辞任し、国軍保安司令官の全斗煥大将が大統領代理に就任するとの情報を外務省が得た」

手元には記事のスクラップが残っていないので、京都新聞縮刷版

(15日付夕刊、1面左肩4段)で確認した。今、読み返すと汗顔の至りだ。「政府筋」はふつう首相官邸や閣僚、各省庁の高官を指す広いものだが、最後に「外務省」を入れたことで、頭隠して尻隠さずになっている。読む者が読めば、この「政府筋」も外務省高官のことだと分かったらう。

「明日にも」とせず「極めて近い時期」としたのは、外れたときのリスクを考へてのことだ。今なら「16日も発表する」との情報もあるくらいは入れたかもしれない。当時は、怖くて書けなかったように記憶する。

同縮刷版の16日付朝刊には続報がある。これは当然ながら外信部が引き取って書いた。記事は「全斗煥・韓国新大統領 今月中に就任へ／崔大統領きょう辞任声明」とあって、脇見出しにわざわざ「外務省首脳確

認」と入れてある。朝刊記事は、主として韓国の報道を引用して書かれており、ファーストハンドの情報が欠けているので、それを補強するためと、共同が抜いたのを印象付けようと外信部記者が敬意を表して書いてくれたと勝手に思っている。

実は、このとき共同通信はソウル特派員がいなかった。前任の林憲一郎支局長が国外退去させられていたからだ。外国の政変を書けた理由、あるいはもう少し積極的な理由は、特派員がいなくても韓国情報に関しては共同が強いところを示したいとの思惑もないではなかった。ちなみに受賞時の編集週報(社内報)には「ソウル支局閉鎖中という困難な状況下にもかかわらず、この国際的スクープができたのは…」と編集局サイドがわざわざ言及している。

この日は次官懇談の日だった。それでも情報は裏打ちされた。編集週報に私は「夕方の定例懇談の後で、他社の親しい記者から『当たっていいね』と声を掛けられたときが一番うれしかった」と率直に書いていた。裏返すと、記事は出したものの、とんでもない誤報になりはしないかと、内心びくびくしていたのである。ほかのトクダネ記者はどんな気持ちなのだろうか。自信満々なんだろう。

うか。それとも、私と同じく気が気でない心境なのだろうか。

◆捕虜収容所でのドイツ人と日本人

今回、この原稿を書くに当たって、情報ソースを守り続けるかどうか迷った。私の判断としては、もう時効だろうということと、高島さん(後に駐ロシア大使、最高裁判所判事を務められた)も鬼籍に入られているので、情報源を明らかにしても実害はあるまいと考えた次第だ。

高島さんといえば、条約局長時代の日中国交正常化交渉で正論を押し通したが故に、周恩来総理をして「法匪」と言わしめ、最後には「こういう有能な人物が欲しい」と言わしめた人物。もっとも「法匪」発言については、読売新聞の島脩氏が本会報2002年3月号の『書いた話書かなかった話』で、その趣旨の厳しい発言はあったものの、その言葉自体は周恩来から発せられなかったことを実証している。

次官公邸での定例懇談も楽しみだった。高島夫人がときどき顔を出して何かと口を挟むのが面白かった。高島さんは嫌がるでもなく、自然に振る舞っていたように思う。

そのとき聞いて印象深いのは、シベリア抑留時の話だ。高島さんはシ

ベリアから移されて、ウラル以西の捕虜収容所にいた。そこではドイツ人捕虜と一緒にいたという。ドイツ人も日本人もロシア人を馬鹿にしていた点では同じだったが、ドイツ人は結束してロシア人をだます方策を考えたのに対して、日本人は個々人が抜け駆けする点で違っていたと、話された。ほとんどの雑談は忘れたのに、この話だけは今も覚えている。これを発展させれば、日本人論につながりそうだ。

◆新自由クラブ解党情報

高島さん関連ではないが、深く関与したトクダネは、86年8月11日の新自由クラブ解党の報道だ。

「こちらの新自由クラブ所属の市議が『新自由クラブが近く解散する』と言ってますが、知ってますか」「エッ、何だっ！」

午後3時30分、最初の情報を政治部の野上浩太郎デスクにもたらしたのは岸和田通信部の中村博文記者(このときの編集局長努力賞は中村記者だけに与えられた)。学生時代から11年間、政治部でいわゆるボーヤ(編集庶務)として働いていた。岸和田市役所記者クラブには朝日、読売の記者もいたが、他社が大阪社会部デスクを介して連絡している間

に直接、政治部デスクに電話したのだった。

私は当時、平河クラブ・キャップになったばかりだった。野上デスクからの情報を受けて、新自由クラブ担当の三笠博司記者に取材に行ってもらった。三笠記者は山口敏夫幹事長周辺を当たって戻って来て「間違いないですね。12日午後0時半からマツヤ・サロンで全国幹事会。15日党大会で正式に解党を決めます」と言う。直ちに野上デスクに電話し、フラッシュを出したのが午後4時4分だった。

この時間帯では新聞には影響がない。ラジオ・テレビの動きを追ったが、なかなか動きがない。大丈夫かなと不安に思っていたとき、NHKが午後5時15分、テロップを出した。1時間以上経っていた。

このときは三笠記者を信じていたので、誤報という不安は感じなかったが、それでも後追いが出て初めてほっとした。

全斗煥大統領就任時の報道の時と同様に、トクダネというのは、後からは胸を張って言えるのだが、そのプロセスでは決して心穏やかなものではないな、と悟った。

被災地通信③ 岩手県 気仙地域

食卓に戻るその日まで 地元酒蔵 帰郷への思い

小田野 純一 (岩手日報社)

いつも食卓に並んでいたものがない。食事はできても何かが物足りない。岩手県大船渡市、陸前高田市、住田町の「気仙地域」と呼ばれる沿岸南部の住民にとっては、それが酔仙酒造(金野連社長)のお酒だった。

同社は1944年、陸前高田市と大船渡市の造り酒屋8軒が1つになり、陸前高田市の中心部に酒蔵を構えた。日本酒だけで年間約100万リットルを出荷。半数は北海道、首都圏など県外に流通していた。

東日本大震災の津波で酒蔵は壊滅

し、約150本あったタンクは全て流された。従業員7人も犠牲になった。従業員らは、こらえきれない涙の中に再建への思いを込め奔走。内陸の一関市千厩町で酒蔵や設備を借り受け、2011年8月から酒造りを再開した。翌12年8月には大船渡市猪川町に新工場を建設。日本酒の味や匂いにこだわり、震災前と同じ氷上山系の水を使える場所を選んだ。

酒蔵に入ると大型機械や麹室の近くで木製の道具を散見する。「機械がなくてもみんなが工夫して作ってくれる。一関市で再開したときは全てが緊急マニュアルだったよ」と金野社長。現在の生産量、売り上げともに震災前の約4割。完全復活とは言えない状況を支えているのが従業員の経験や能力だ。何でも話し合える温かな雰囲気。限られた資金の中でより良い酒を造るために、それぞれが積極的に動く。

復興の歩み発信する新酒 ぜひ味わって

「日本酒の日」の今年10月1日、酔仙酒造の看板品種「活性原酒 雪っこ」の新酒販売を始めた。1970年の発売から冬期間に造られる白く濁った原酒として多くの人に愛さ

れている。とろりとした甘さが人気、関東地方にも出荷しているののでぜひ一度味わっていただきたい。地域の活力になるとともに、復興へ歩む気仙地域を広く発信する酒として期待している。今年は前年度比約1万8千リットル多い約15万1千リットルを出荷予定。清酒は飲み飽きないようにやや辛口に仕込み、同約6万8千リットル多い43万3千リットルを予定している。

同社のほか日本酒蔵元で被災したのは宮古市の菱屋酒造店(銘柄・千両男山)、大槌町の赤武酒造(同・浜娘)。菱屋酒造店は流された工場跡に新施設を再建し、赤武酒造は盛岡市で酒造りを再開した。現在、県内には22の日本酒蔵元がある。

「誰もが普通に 飲める酒でありたい」

現在、被災地は復興工事が懸命に進められている。「奇跡の一本松」が復興のシンボルとなった陸前高田市は、被災規模が大きく被災者の7割に当たる1417世帯(9月末時点)がいまだ仮設住宅で暮らし、自立へのスタートラインに立てていない人も多い。市内では住宅再建や中心市街地の形成に向けて、高台の宅



10月1日から販売が始まった酔仙酒造の「活性原酒 雪っこ」(岩手日報社提供)

地造成、津波被災地のかさ上げ工事が続いている。高台造成地から土砂を搬出してきた巨大ベルトコンベヤーは9月15日に運転を終了。至る所に盛り土が見られ、復興事業は新たなステージへ進んだ。

「いつかは陸前高田に戻る」。金野社長の将来設計には「帰郷」の思いがある。地元住民に愛され、ともに歩んできた酔仙酒造の71年の歴史。陸前高田市に酒蔵が戻り、当たり前のように食卓に酔仙酒造のお酒が並んだ時、復興できたと感じるだろう。「誰もが普通に飲める酒でありたい」。ナンバーワンよりオンリーワン。復興を終えた街を夢見て、酔仙酒造の奮闘は続く。

おだの・じゅんいち▼2003年入社
釜石支局 運動部を経て 15年から陸
前高田支局長

私が会った
あの人

何が「つらい」と言わせたのか

最後の琉球政府主席・屋良朝苗さん

軽部 謙介（時事通信社）

曇り空だった記憶がある。傘を差すほどではないにしても、雨粒がばらばらと落ちていたかもしれない。1986年3月。屋良朝苗さんと初めてお目にかかった日のことだ。

引退して10年。屋良さんはこの時すでに83歳になっていたが、トリードマークの丸メガネをかけ背筋をびんと伸ばして沖縄県庁中庭のイスに腰掛けていた。

「最後の琉球政府主席」「本土復帰の立役者」「初代沖縄県知事」。さまざまな肩書や形容が付与される屋良さんがこの日来賓として招かれたのは、取り壊しが決まっていた「県庁第一庁舎」のお別れ式だった。

ガジュマルに囲まれ小中学校の校舎のようなたたずまいだったこの建物は、53年に米軍が建設。琉球政府の本庁舎として、72年の復帰

後は沖縄県庁の「第一庁舎」として使われた。現在の巨大な県庁はその跡地に建つ。

式典終了後、那覇支局に勤務していた私は屋良さんに「どんなご感想ですか」と聞いた。スクラップ帳に貼られた自分の記事に答えが残っている。

「復帰前後の時期なのでいろいろなことがあります。感慨深いと言えます」

そしてこう言葉を継いだ。「昔を思い出すとつらいこともあります」

屋良さんが琉球政府の主席を務めていたのは、本土復帰への動きが本格化したころだ。毒ガス移送、コザ暴動事件、円ドル交換など次々に難題が吹き出し小さな島は揺れに揺れた。しかも「沖縄の帝王」と呼ばれた米軍高等弁務官が君臨していただ

けに、主席としての苦労は並大抵ではなかったに違いない。

まじめで誠実だった屋良さんは「激しくやると歯が折れる」として「鈍角の態勢」をモットーにしていた。しかし、時にそれは「優柔不断」「日和見」と揶揄され、信賴する部下の離反にも遭遇する。日本政府との距離をめぐって「革新陣営」の支持者たちから厳しく批判された。

復帰の中身も屋良さんたちが求めたものとは程遠い内容だった。密度や機能において「本土並み」の返還だったはずなのに、嘉手納基地や普天間基地も含め大半の米軍施設がそのまま残ることになったのである。今に続く復帰後の基地問題はここから始まった。

沖縄県公文書館で公開されている屋良さんの日記を読むと、「余りに



長官と事務次官の屋良朝苗（右）と返還に尽力した中山正徳（左）の会談（1970年5月20日）の記録写真（提供：時事通信社）

も荷は重し」にない切れない課題を背負っている」などと本音が吐露されている。自身を「時代の人柱（ひとばしら）」などと表現した箇所もあった。眉間にしわを寄せた屋良さんが内心何を考えていたのかよく分かる。

「お別れ式」で初めて言葉を交わしたのを機会に、それから一、二度、那覇市内のお宅を訪ねて話を伺った。復帰のころまだ高校生だった若い記者を相手にしても、きちんとした居住まいを崩さず、一言、一言丁寧に語ってくれたのが印象に残っている。

現役時代を全く知らない私に、この人を語る資格はないかもしれない。しかし、沖縄の苦悩が拡大再生産されている現状を考えたとき、原点となる時代を生きた屋良さんの軌跡をたどることは重要だと思う。

旧琉球政府庁舎を見上げたとき、何が「つらい」と言わせたのか。もう一度考えてみたい。

（かるべ・けんすけ 解説委員長）
次は永野健二さん（日本経済新聞出身）にバトンが渡ります。

マイBOOK マイPR

■ドイツリスク 「夢見る政治」が引き起こす混乱

三好 範英 (読売新聞編集委員)

何事も表があれば裏がある。当クラブの会見に時々おじゃましていますが、ゲストがドイツの人間だと必ず出る質問が、「ドイツは模範。日本に何かアドバイスを」。最近読んだ本には、「ドイツの労働効率性は高い。日本も学ぶべき」とあった。「何があっても午後5時ぴったりに帰宅する」社会は、サービス不在の不快社会を意味することは、ちよつと想像すれば分かりそうなものだが。何事も表があれば裏がある。本書で取り上げた、ドイツの脱原発、ユーロ問題、歴史認識問題なども同じ。世界のどこにも理想の国などない、という日本人の自覚の一助になれば幸いである。



光文社新書 907円

■日本はASEANとどう付き合うか・米中攻防時代の新戦略

千野 境子 (産経新聞出身)

ASEANの流儀を知る インドネシアの高速鉄道受注合戦で日本は中国に敗れた。でも親日でODA最大の

の受取国なのにと怒ってもダメ。国益優先は日本も同じなのだから。これは東南アジア諸国連合(ASEAN)にも当てはまる。

米中攻防の太平洋を舞台に、米中も日本も大事とサバイバルを図るASEANの流儀とは。設立の背景や争わぬ仕掛け、加盟国の対中・対米観の深層などを書きつつ、ますます重要になるASEANと日本の最善の関係構築に向け、提言も試みた。



草思社 1944円

■美智子さまマナーとお言葉の流儀

渡邊 みどり (日本テレビ出身)

人を大切に想う心72のエピソード
世の女性たちに、美智子さまから眞子さま・佳子さまへ引き継がれる「人を大切に想う心」をお届けしたい。

そんな思いから本書は生まれた。皇后美智子さまの立ち居振る舞いはいつでも気品に溢れている。諸外国や被災地への訪問で見せられるお相手を気遣ったお言葉、TPOに合わせたファッション、そしてそのお心を伝える子育てなど、エピソードは合わせて



こう書房 1512円

72。私たちの生活にも直結するので、一読してぜひ役立てていただきたい。

■インドの社会と名誉殺人(チャンダ

ー・スター・ドグラ著、鳥居千代香訳)

鳥居 千代香 (帝京大学外国語学部教授)

私的制裁を追う 名誉殺人とは、親が決めた相手との結婚を拒んだり、共同体の掟に反する相手と結婚を希望したり、結婚した女性や相手の男性が「名誉を汚した」と家族や部族の長老の決定で殺される私的制裁のことである。インドでこの種の事件

は多いが、初の有罪判決が下され、現在なお最高裁判所で係争中の事件をジャーナリスト(女性)が身を危険に晒しながら追う。

インド最大の通信社PTIでも同様の事件が起きた。同社で働く男性ジャーナリストの婚約者が実家で命を落とした。彼女もジャーナリスト。2人とも最上位のパラモン階級のカーストであったが、その内部の身分が男性の方が低かったのが原因だと言われている。



つげ書房新社 2700円

マイBOOKマイPR Again

■大村智 2億人を病魔から守った化学者

馬場 錬成 (読売新聞出身)



中央公論新社 2268円

ノーベル賞受賞を予言して的中させた本 新聞記者の勤が当たった。大村智博士がノーベル賞受賞者になると確信したのは2011年である。文藝春秋社の「2013年の論点」の中で「オンコセルカ症の特効薬の貢献」ということなら単独で生理学・医学賞受賞もあり得る」とスバリ予言していた。取材の端緒は荒井寿光・元特許庁長官の示唆だった。大村博士の産学連携活動を世の中に紹介するのが、ジャーナリストの仕事だと言う。大村博士が特許ロイヤルティーで250億円を研究現場に持ってきた実績もすごい。取材を掘り下げていくうち天然有機化合物の研究でもっとすごい業績を挙げていることを知った。これはノーベル賞ものだ。ノーベル賞を研究してきた筆者は、業績内容を知ると受賞できるかどうか分かる。勤である。荒井さんに認めてもらうため『大村智』を上梓し勤を世に問うた。受賞後に大村博士のすごい業績だけでなく、魅力あふれる人柄が世に知れ渡った。そのほうがもっとうれしかった。

■ 会議報告

● 第367回会報委員会

(10・8 大会議室)

11月号の編集と12月号の「わたしのおすすめ本」、クラブゲスト面改革について協議した。来年1月号の「新春随想」を滝鼻卓雄元理事長に依頼することを決めた。

出席 飯塚委員長、鈴木、渡辺、向山、佐塚、大寺、長崎、藤井、藤澤の各委員。

● 第456回企画委員会

(10・9 会場)

今後のゲスト候補について協議し

たほか、年初恒例の経済見通し研究会の担当委員などを決めた。

出席 西村委員長、安井、倉重、福本、実、水野、別府、宮田、榊原、川上、山本、瀬口、原田、宇留間、島田、杉尾、小栗、和田、堀、梶本、橋場の各委員。

● 第458回会員資格委員会

(10・15 小会議室)

11月1日付入会を審議し、理事会に答申した。

出席 小田委員長、菊池、花谷、越中、小池、播摩、畑山、山本の各委員。

● 第575回理事会

(10・26 大会議室)

一、2015年度上半期の記者会見などの行事と中間決算について事務局が報告した。

一、最近の会員の増減について事務局が報告。それを受けて伊藤理事長が理事会として引き続き入会促進に取り組むために法人会員、法人賛助会員、特別賛助会員の入会金免除の措置を来年度も取りたいと提案、了承した。

一、日本記者クラブ規約に基づき、2016年度日本記者クラブ賞と同

特別賞を実施することを決定した。

一、マイナンバー制が導入されるのに伴い、「特定個人情報取扱規程」特定個人情報等の適正な取扱に関する基本方針」の制定を決定した。また、「職員就業規則」の一部改定も決定した。

出席 伊藤理事長、水谷副理事長、中井専務理事、西村、小田、原田、飯塚、深田、岡崎、山元、菅生、具志堅、成田、西淵、篠塚、吉田、壺岐、川嶋、木村、西野(文)の各理事、沖永、滝花の両監事。

日本記者クラブ賞・特別賞候補をご推薦ください

日本記者クラブ賞・特別賞の募集が始まりました。締め切りは来年1月30日(土)です。

日本記者クラブ賞は「クラブ会員、または法人会員社に属する個人」を対象とした賞で、創設以来すでに40年を越える歴史があります。

一方、2012年度に新設された特別賞は、原則として「クラブ会員・会員社以外」が対象ですが、会員社の取材班・番組班などチームとしての業績も対象となります。会員社に属する記者個人は日本記者クラブ賞、組織や団体は特別賞というわけです。また、会員社系列の報道機関に属する方の活動も特別賞に該当します。

両賞とも、会員の皆さんから推薦された候補を推薦委員会(個人D会員8人)が審査して、適格な候補若干名を選考委員会(総務委員会)に具申し、選考委員会が授賞者を理事会に答申し、理事会が決定することになります。

応募要項と推薦書を11月中にお送りします。推薦書はクラブのウェブサイトからダウンロードできます。推薦者は所定の用紙で、推薦理由(2000字以内)と参考資料を添えて提出願います。

詳細は事務局の本庄(03-3503-2754)へお問い合わせください。

【日本記者クラブ賞受賞者】 ※2000年度以降、敬称略

- 2000年度 熊田 亨(中日新聞社)
- 2001年度 鳥越俊太郎(全国朝日放送)
- 2003年度 田城 明(中国新聞社)
- 2004年度 春名 幹男(共同通信社)
- 2005年度 黒田 勝弘(産経新聞社)
- 2007年度 松本 仁一(朝日新聞社)
- 清水 美和(東京新聞)
- 2008年度 筑紫 哲也(TBS)
- 2009年度 伊藤 正(産経新聞社)
- 阿武野勝彦(東海テレビ放送)
- 2010年度 梅津時比古(毎日新聞社)
- 2011年度 国谷 裕子(NHK)
- 2012年度 萩尾 信也(毎日新聞社)
- 2013年度 小山 鉄郎(共同通信社)
- 2014年度 橋本 五郎(読売新聞社)
- 山田 孝男(毎日新聞社)
- 2015年度 竹内 政明(読売新聞社)

*2002、2006年度は該当なし

【日本記者クラブ賞特別賞受賞社・者】

- 2012年度 福島中央テレビ報道制作局
- 石巻日日新聞社
- 2013年度 山本 美香(故人)
- 2015年度 伊東英朗氏ならびに南海放送「X年後」制作グループ

*2014年度は該当なし

情報発信

クラブ施設では会員による各種の会合が行われています。企業や大使館などの賛助会員も記者発表の場としてクラブを利用しています。

■カタール・ワーク・コミュニケーションズ 大相撲カタール公演計画発表会見

同団体は日本とカタールのスポーツ・文化の交流を目的として10月に設立された。会見では中東初の相撲公演計画(来年6月に開催予定)が発表された。(10.8 10階ホール)

■第9回安全保障シンポジウム「安保法制審議の検証と今後の課題」

主催：ネットジャーナリスト協会
「変質する安全保障環境に日本はどう対応するのか」をテーマに下記の登壇者が討論した。中谷元・防衛大臣、渡辺周・元防衛副大臣、小野次郎・維新の党総務会長、古庄幸一・元自衛隊海上幕僚長、村井友秀・東京国際大学教授。モデレーターは勝股秀通・日本大学教授が、総合司会は川戸恵子会員(TBSテレビ)が務めた。(10.9 10階ホール)

■「14歳の兵士ザザ」出版記念会

主催：赤十字国際委員会(ICRC)
戦後70年にあたりICRCが企画した「MANGA×ひとのチカラ」キャンペーンの一環として、コミック「14歳の兵士ザザ」を発売した。原作者の大石賢一氏、作画担当の石川森彦氏が、出席した記者らと懇談した。(10.8 大会議室)

■第22回新聞配達に関するエッセーコンテスト表彰式 主催：日本新聞協会

同コンテストは1994年から実施している。今年は「大学生・社会人」「中学生・高校生」「小学生」の3部門で、海外も含めて3912編の応募があった。表彰式には各部門の最優秀賞受賞者ら50人が出席。入賞作品は日本新聞協会のウェブサイトで読むことができる。(10.10 10階ホール)

■日本・トルコ友好125周年記念シンポジウム

主催：中東調査会、日本・トルコ協会
1890年のエルトゥールル号事件から125周年を迎えることを記念した催し。日本・トルコ協会総裁・三笠宮彬子さまのあいさつの後、討論会が行われた。(10.13 10階ホール)

■新聞週間記念の集い 主催：日本新聞協会

今年は「ネット社会における新聞と放送の役割」と題し、大越健介・NHK報道局記者主幹、川上量生・ダウンゴ代表取締役会長、金平茂紀・TBSテレビ執行役員、元村有希子・毎日新聞デジタル報道センター編集委員らが議論した。(10.19 10階ホール)

■放送人政治懇話会

テレビ・ラジオ局の現役・OBらによる勉強会。枝野幸男・民主党幹事長(10.7)、石破茂・地方創生担当相(10.14)、村岡敏英・維新の党国対委員長代行(10.21)、太田昭宏・前国交相(10.28)をゲストに招いた。

新しいOB会員

■ ■ やすだ 龍夫 1967年共同通信入社。テヘラン支局長、整理部長、予定センター長など。共同通信退社後は新聞通信調査会編集長を務めた。



月刊誌「メディア展望」(新聞通信調査会発行)編集長を9月末に退任しました。編集者稼業の妙味をちょっぴり味わったところで、また個人会員としてお世話になります。

■ ■ やた 部 雅 嗣 1973年NHK入局。アナウンサー、番組ディレクター、解説委員などを務め、今年3月退社。



今後は、感染症と生命進化を主なテーマに、活動を続けていきます。緊張感を保つため、日本記者クラブを活用させていただきます。

福井と沖縄のニュースサイト 原発と基地の今、発信「フクナワ」誕生



福井新聞社と沖縄タイムス社は、原発と基地に関するニュースを発信する「フクナワ 福井と沖縄、原発と基地のニュースサイト」を立ち上げた。エネルギーと安全保障という国策を支えてきた2つの県の状況を広く全国に伝える。

福井県は原子力発電所を誘致してから半世紀以上、原発と向き合ってきた。現在は再稼働や廃炉といった問題に直面している。沖縄県は戦後の米軍統治下以降、米軍基地を抱え、今は普天間飛行場の名護市辺野古移設という大きな局面を迎えている。

自治体の動向や住民の思い、政府の動き、全国各地の状況を地元視点でつぶさに伝えていく。アドレスは<http://fukunawa.com>

(福井新聞編集局デジタルラボ 野尻幸宏)

秋のゴルフ会 本田会員が初優勝



10月20日(火)、秋晴れの下、磯子カンツリークラブ(神奈川県・Par71)で第104回ゴルフ会が開催されました。参加者は13人。小嶋健史会員(個人D・日経出身)が初参加でした。優勝は本田来介会員(個人D・読売出身)でグロス99、ネット59の驚異の12アンダー! 「クラブのコンペではハーフ60を切ったことがなかったのに…」とのことでしたが、後半の46はお見事。おまけに最終18番ではバーディーと聞いて、全員脱帽でした。2位は小嶋会員、3位は阿部和義会員でした。

(事務局・河野聡)

レストラン * 価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 霜月懐石(11/30まで)

先付：穴子小袖寿司 お椀：蟹真丈 造り：3点盛り 焼物：鱈養老焼きほか 煮物：ぜんまい 信田巻 揚物：金目鯛唐揚げ 食事：鯨そば 水菓子：季節の果物 グラス冷酒付き(5,400円)
(板長：大井由光)

洋食 いのしし肉のシチューコース(12/28まで)

ズワイガニ肉のサラダ仕立て、オイスターチャウダーまたはポタージュ、丹波篠山産いのしし頬肉のシチュー 温野菜添え、チョコレートナッツサンデー、パン、コーヒー付き(3,780円)。ランチ、ディナー(土曜日はランチのみ9階レストラン)ともにご利用いただけます。(シェフ：黒須修一)

ふぐ懐石を用意しました

11月24日(火)～1月29日(金)

毎年好評いただいている「ふぐ懐石」コースを今年も用意しました。刺身、唐揚げ、鍋などふぐづくしの懐石をお楽しみください。アイスクリームのデザートがついて5,940円です。予約(03-3503-2723)をお願いいたします。

忘年会、新年会は個室をご利用ください

12月1日(火)～1月30日(土)

忘年会・新年会、社内の集まりや会合に、お手ごろなプランをご利用ください。お一人3,240円(洋食8品と寿司、そば)で、1,404円をプラスして2時間の飲み放題にもできます(別途、部屋代)。10～40人までお受けします。ご予約は03-3503-2724へ。

11月の行事予定(11/4現在)

18㊦	15:00～16:00 10階ホール 記者会見 ティエリー・ダナ・駐日フランス大使
20㊦	15:30～17:00 10階ホール 記者会見 松元剛・琉球新報編集局長次長
24㊦	15:00～16:30 9階会見場 シリーズ企画「戦後70年 語る・問う」 不破哲三・元日本共産党委員長

HP更新情報 <http://www.jnpc.or.jp/>

音声アーカイブ (日付は会見日) **重要会見の音声録音**

- 5 党党首討論会 (1990.2.2)
- 9 党党首に聞く (1993.7.2/7.3)
- 6 党党首討論会 (1996.10.7)
- 7 党党首討論会 (2000.6.12)
- 7 党党首討論会 (2001.7.11)
- 6 党党首討論会 (2003.10.27)

*「音声アーカイブ」へは、クラブウェブサイトのトップページからアクセスできます。

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎ 3503-2723
- 洋食レストラン(10階) …… ☎ 3503-2766
- 貸室予約・宴会打ち合わせ …… ☎ 3503-2724
- 受付 …… ☎ 3503-2721
- 会員事務 …… ☎ 3503-2727
- 経 理 …… ☎ 3503-2728
- クラブ行事への申し込み …… ☎ 3503-2722
- 会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：135社 ● 基本会員：745人 ● 個人会員：1,357人
 - 法人・個人賛助会員：64社・143人 ● 特別賛助会員：98人
 - 名誉・功労会員：12人 ● 学生会員：156人
- 計：199社・2,511人

記者ゼミ生を募集しています

第3期記者ゼミ「次世代ジャーナリズムの現場～その原則とスキル」は、11月からジャーナリズムの原則に関連するシリーズに入ります。来年3月まで行う予定です。

ゼミ生の登録を随時受け付けています。対象は法人会員社の現役の方で、クラブ会員でなくても構いません。登録ご希望の方はseminar@jnpc.or.jpへご連絡ください。なお、記者ゼミはインターネットによる動画の同時配信も行っています。

- ▶ 第10回 11月27日(金) 15:00～17:00
「権力監視の条件と環境」 高田昌幸・高知新聞社編集局報道部副部長・部長待遇
- ▶ 第11回 12月7日(月) 14:00～16:00
「改正個人情報保護法と表現の自由～取材の自由を中心に」 岡村久道・弁護士
- ▶ 第12回 12月18日(金) 15:00～17:00
「報道の公正・多様性」 山田健太・専修大教授

書棚の本 お分けします

ラウンジの書棚にある会員社や会員の皆さまからの寄贈書は、スペースに限りがあるため、一定期間を過ぎた本を定期的に整理させていただいています。12月1日(火)、2日(水)の2日間、4年以上たった寄贈書の一部をラウンジでお分けします。

クラブのオリジナルワイン

日本記者クラブの名を冠したワインがあるのをご存じですか。赤は「DOCGヴェルナイオーロ・キャンティ」。白は「DOCオルヴィエート・クラシコ」。シニアソムリエの資格を持つフロアマネジャーの服部健が厳選したイタリア・ワインです。ボトルラベルには、クラブ緞帳でおなじみのNKCマークを使用しています。

価格はボトル3,150円、グラス630円(いずれも税込み)です。ラウンジ、レストラン、パーティーでお楽しみください。

<法人会員代表変更>

- ▶ 日本BS放送 板井俊二・報道局長(旧・二本啓孝)
- ▶ 札幌テレビ放送 島田洋一・代表取締役会長兼社長(旧・小林裕孝)
- ▶ TVQ九州放送 角谷憲一・代表取締役社長(旧・河西敬一)

<訃報> 岩崎公彦会員(共同通信出身、82歳)が7月10日、上田隆郎会員(NHK出身、85歳)が9月末死去されました。ご冥福をお祈りします。

会報委員会

- 委員長＝飯塚 浩彦
- 委員＝稲沢 裕子 大寺 廣幸 佐塚 正樹
鈴木 仁 高橋 茂 長崎 和夫
藤井 良広 藤澤 秀敏 向山 明生
渡辺 大祐

(事務局：長谷川和子 村田 茜)

☎ 03-3503-2752 FAX 03-3503-7271

撮影：尾形 祐介 (共同通信写真部)



マイナンバー制度が始動し、広報キャラクターと個人番号の通知開始をPRする横浜市の林文子市長
=10月5日 JR 関内駅前

あなたにとっての個人番号

マイナンバー制度が始まる、と聞いて少々焦った。いろいろな番号には、かねてからお世話になっている。住民票から保険証、パスポートなど、まあ日ごろは映画館の高齢者割引で、ちよつと気が引けそうに出す程度だが、今度の番号はそんなものじゃないらしい。とにかく全国民すべてに、12桁の番号を割り振って行政の簡素化、効率化を図るといふ。確かに効率は格段に良くなるだろう。

話は飛ぶが、これを聞いてふと、思いついたことがある。世界中の軍人が戦場に携帯する「認識票」のことだ。アメリカの軍人はあれを「ドッグタグ」と呼ぶそうだ。「こんなもの、首にぶら下げて、ワゴン公と一緒にだ」という声が聞こえてくる。でも何となく明るい響きがある。

マイナンバーのほうは、横文字で親しみやすさを一応装ってはいるが、役所を舞台にした詐欺事件なども出現するに及んで、やはり役所の皆さん身構えていらっしやる。通知や利用、個人番号カードの手続きで、国や自治体が暗証番号や資産の状況など聞いたりするとは、一切ありません。そうか、オレオレ詐欺の注意広報にもこんな文句があったつけ。詐欺師というのは、ほんとによくもあんなうそをペラペラしゃべるもんだ、と感心してはいけません。それが詐欺師というものですから。

で、行政の効率化はおそらく確実に進むだろう。だから横浜の林市長さんも宣伝キャラのマイナちゃんを連れだして、通りを行く人たちに笑顔を振りまいておいてです。

(後藤 文生)